



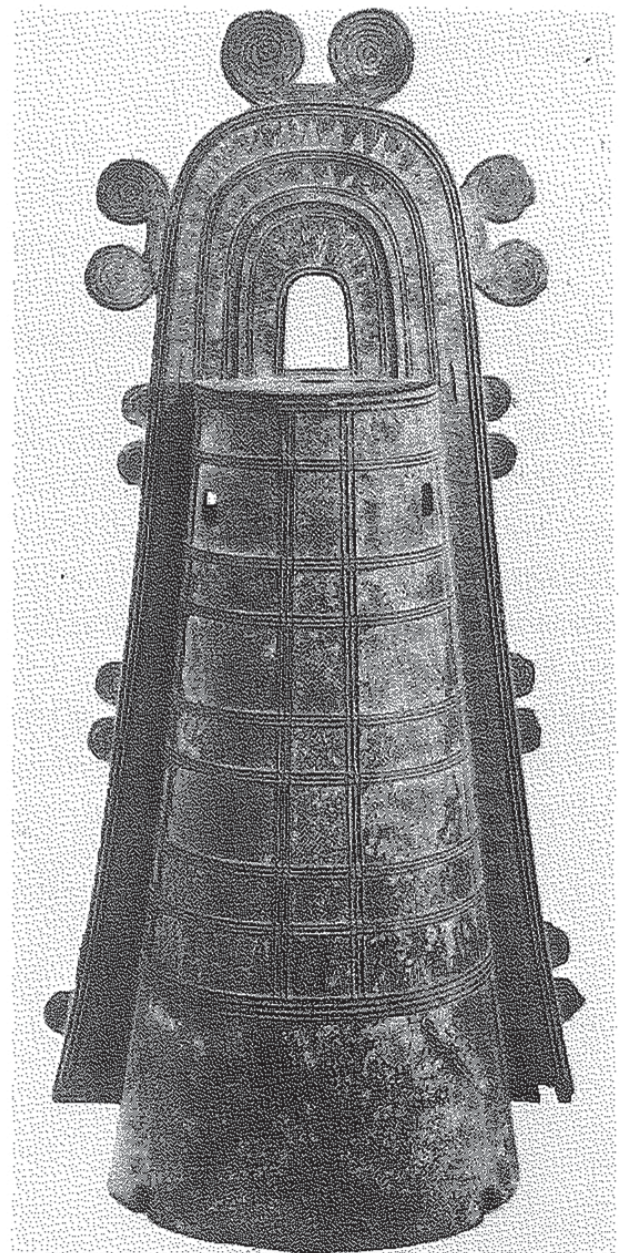
# 近江の銅鐸

## 銅鐸の発見史を飾る近江

『扶桑略記』という書物があります。平安時代の末、延暦寺の僧でありました皇円阿闍梨が書きましたものです。この書物の中に、「天智天皇の7年正月17日、近江国志賀郡に崇福寺を建つ。はじめて地をならしむるに奇異なる宝鐸一口を掘り出す、高さ五尺五寸。また奇妙なる白石を掘り出す、長さ5寸」といった記事が見えます。この記事は、銅鐸と今も私たちが呼んでおります青銅器の発見を伝える最古の記録であります。銅鐸発見史の最初を飾る重要な記録であり、近江崇福寺の名は、天智天皇御願の寺、近江朝のモニュメントとして有名なばかりでなく、考古学上では銅鐸の発見がまず最初に記録された土地として著名なものとなっております。つづいての記録は『続日本紀』にあります和銅元年(708年)奈良県宇陀郡長岡郷で発見されました高さ三尺、径一尺という銅鐸であり、「その制常と異なる」と記されています。崇福寺で銅鐸が発見されてから丁度40年後のことです。

崇福寺の寺地から発見された銅鐸については「奇異なる宝鐸」という言葉が使われていますし、長岡発見の銅鐸では、その制常と異なるといった言葉が記されています。寺々で使う風鐸や梵鐘にくらべますと銅鐸の形や大きさは異常なものであります。奇異とかふつうの制とは異なるといった表現が出てくるのも当然でしょう。しかし、言葉を換えますと、天智天皇の御代には、既に銅鐸といま私たちの呼んでおります品は、もう用途も名前も、使われた時代も完全に忘れてしまっていたと言

うことができるのです。謎の銅鐸という言い方はこうした発見の経緯の中からも出てくるわけであります。近江は、まさに銅鐸発見史の第一頁を飾り、銅鐸の謎を生み出した最初の土地として、大きな榮譽を荷ったのであり



一老坊発見の銅鐸 石山寺所蔵  
(重要文化財) 袈裟禪文銅鐸

ます。

### 銅鐸の発見史を彩る近江

銅鐸の発見史を語る場合、欠かすことのできないものに、野洲町小篠原の地があります。明治14年、小篠原の大岩山で遊山に参ってありました地元の人たちが実に14個という多量の銅鐸を発見したのであります。この時は皇室博物館に3個をとどめ残りを地元払い下げた結果、いまでは散逸して野洲の地には1個もなく、逆に西ドイツのケルン博物館にまで渡るといふ結果になりました。この14個の銅鐸の一括発見はいまだ例を見ないところであり、一層銅鐸の謎を深めることになりました。ところが、昭和37年7月、東海道新幹線の道床用の採土がこの小篠原で行われ、重機を運転しておられた崔鐘来さんらの手で10個の銅鐸が発見され、またまた大きな話題となりました。同じ土地の同じ丘陵の極めて近接した位置からの発見であろうと考えられています。この時の知事は谷口久次郎先生でありまして、本来ならば国保有となり滋賀県に保管することは難しい状況でありましたが、再三交渉され、はじめて滋賀県の有に帰した経緯があります。日本で銅鐸が県に帰属した最初の例であります。このようにしまして小篠原では計24個という、いまだ全国に例を見ない多量の銅鐸の一括発見となり、銅鐸発見

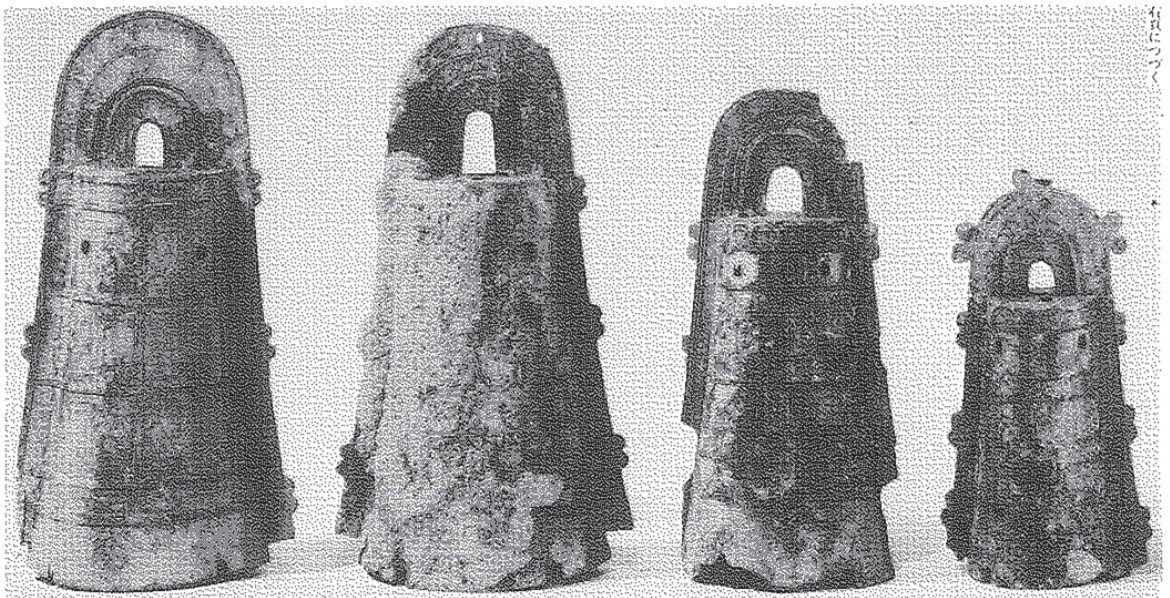
史に鮮やかな彩りをそえることになったのであります。

### 近江に銅鐸の分布を見る

近江で発見されています銅鐸は33個、日本全体の発見銅鐸数の約10<sup>セント</sup>にあたります。銅鐸の多い、遠江(静岡)や紀伊(和歌山)よりも多く、全国第一位であることは言うまでもありません。しかし、小篠原の24個を除きますと9個となり、決して銅鐸の多い地域とは言えないのであります。まずこの9個の銅鐸を見ますと、守山市新庄、草津市志那、竜王町山面2個の計7個が、その形も小さく飾りけの少ない本来の鳴らす楽器にふさわしい形をしております。一方、扶桑略記に記されております崇福寺と有名な石山寺所蔵(重要文化財)の一老坊発見銅鐸の2個はその形も大きく飾りたてた荘重優美な、楽器からは少しイメージの異なる一面をもった銅鐸であります。考古学の世界では前者を『聞く銅鐸』、後者を『見る銅鐸』と呼んでおります。言うまでもなく前者は古く後者が新しく、前者が二世紀、後者が二世紀末から三世紀に用いられたと考えられているのであります。

近江の場合、『聞く銅鐸』は野洲郡と蒲生郡に分布し、とくに蒲生郡の場合も野洲郡に接した地であることが注目されますし、『見る銅鐸』は、志賀郡と呼ばれた地域のみ分布

▶昭和三十七年野洲郡野洲町大字小篠原大岩山出土の銅鐸十口(県指定有形文化財、滋賀県所蔵)

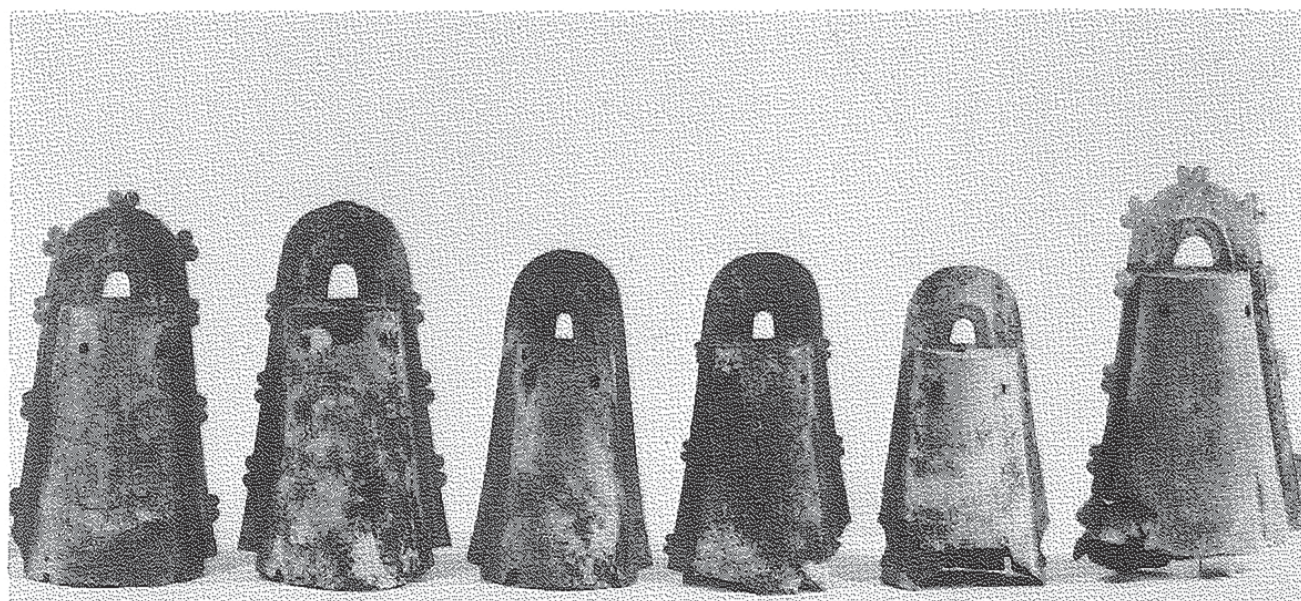


していることが知られているわけであり、県下一円に分布するのではなく、強くかたよった分布を見せているのであります。湖西にも湖北にも現在見られないということは重要なことでもあります。野洲郡は元来、ヤス（野洲—安国造家）氏の根拠地であり、また志賀郡はワニ（和邇）氏の根拠地でありました。二世紀にはヤス氏に銅鐸が配られ、二世紀末から三世紀にはワニ氏に銅鐸が配られていったといえそうなのです。

### 銅鐸の配布をめぐる解釈

ここで、視野を近江から全国に拡げて、銅鐸の配布を考えて見ることにしましょう。『聞く銅鐸』は、一は石川から島根まで日本海沿岸に、一は京都から大阪・兵庫を経て広島に至る瀬戸内海北岸にそう形で、また一は大阪湾から和歌山、淡路、徳島、香川といった瀬戸内海南岸にそう形で分布しております。要約しますと日本海海路、瀬戸内北岸海路、南岸海路を中心に分布していると言えるのであります。このほか奈良・滋賀・岐阜・愛知・三重といった壬申の乱の路を想わせる陸路ぞいにこの種の銅鐸が見られるのであります。私にはこうした分布から一つの意味が読みとれるように想えるのです。『聞く銅鐸』は中国や韓国をまじえた国際的な緊迫状況の中で、我国が水軍を発して軍勢を進めるといった事

件があり、東山道・北陸道で兵を集め、大阪湾（紀川口、武庫川口を含め）なり敦賀若狭湾から瀬戸内北・南岸海路、日本海路を用いて西下するといった動きに伴って配布されたのではないかと考えるのであります。一方の『見る銅鐸』は、静岡・愛知に集中しており、点々と滋賀・京都・三重にあり、和歌山・徳島・高知といった紀伊水道兩岸にはまた集中して数多く見られるのであります。ここでも私の考えをのべますと、水軍を発する軍港が和歌山県南部にも移り紀伊水道が一層浮上するとともに、兵士は静岡・愛知から集められここから滋賀・三重を経て大阪湾なり紀伊水道に赴くといった第二次の国際的緊張に対応する動きが見られたのではないかと思うのであります。こうした動きに伴って『見る銅鐸』は拠点となる土地に配布されていったのだと考えているのです。こうした動向が浮かび上がりますと、近江の銅鐸の意義も明確になって来るのであります。古い段階の銅鐸が野洲郡を中心に見られることは東海道を行く兵士などの往還を監視・掌握する機能が与えられていたと思われるのであります。岐阜でも東海道の銅鐸が見られ、同様に考えられるのであります。新しい段階の銅鐸が志賀郡に集中するのも、東海道の往還を掌握するといった機能と、琵琶湖・瀬田川をめぐる水上権の



掌握といった機能が与えられての銅鐸の配布であったと推測されるのであります。こうした配布が二次にわたる国際的緊張の中で醸成されたものであることは改めて説くまでもありません。

### 銅鐸の配布者・近江の安氏

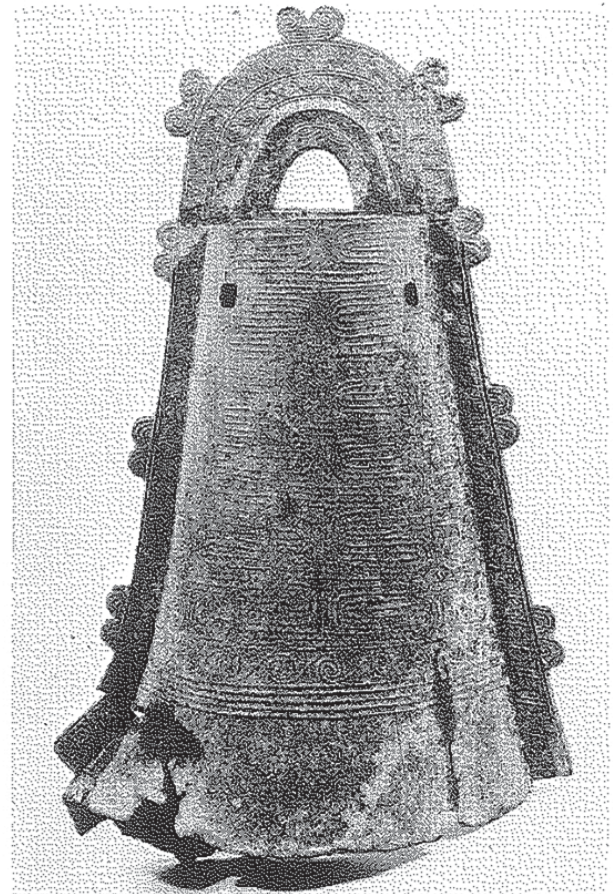
こうした銅鐸と区別されるのは、24個の銅鐸をもつ小篠原銅鐸群の性格であります。14・10個の二群に分けるとしても恐るべき量の銅鐸であります。従前の見解では、この数は、付近の銅鐸を所有した村々を統合していく中で統一者たるこの地の首長のもとに集められたものと考えられていますが、私はヤス氏が銅鐸配布機構の枢要にあった結果であり、配布の残りを一括収納したのではないかと考えているのであります。銅鐸の配布機構には、鑄造されたばかりの銅鐸は当然のこと、一旦配布後、収奪したり返却させた銅鐸が再配分のために置かれる場合もあったに違いありません。

ヤス氏の銅鐸配布の以前に、銅鐸を配布する職掌をもったのは、兵庫県の桜ヶ丘銅鐸群の背後にあった人物であります。14個の銅鐸と7振の銅戈を一括埋蔵しておりました。これらの銅鐸は全て『聞く銅鐸』であり、同じ作者の作品かと思えるものなど、いくつかのグループが見られますが、やはり再配分のための銅鐸もあるようであります。ところで、この桜ヶ丘銅鐸群を出しました地は御影山の一面であります。御影の名を聞きますと想起されますのは、ヤス氏の奉斎しました御上神社の祭神一天御影命であります。ともに御影神をまつる氏ではなかったかという想いがするのであります。『聞く銅鐸』を第一次の緊張時に配布したのも、『見る銅鐸』を第二次緊張時に配布したのも、ともにヤス氏であった可能性が指摘されるのであります。

ヤス＝安氏がなぜ銅鐸の配布機構に連なったのか、その解釈に登場するのは、息長氏の存在であります。息長氏は長浜付近に出た名

族であり早く大和に出、朝廷の根幹を形成した豪族中の豪族であります。近江は、息長・安・和邇氏の三大氏族がはばたく地であり、三氏の中に親族＝同族的結合が早くから生まれていた地であります。それだけに、ヤス氏にこうした職掌を与えたのは、中央に出た息長氏ではなかったかと考えるのであります。後に巨大な応神天皇陵などを誕生させたのも息長氏でありますし、韓国に兵を進めたとされる神功皇后も息長氏の出であります。御上祝が奉斎している天御影神が現身と化して女人を娶とり誕生したのが息長水依比売でありこの水依比売が日子坐王の妃となり水穗真若王を生み、この皇子が安氏の祖となったと『古事記』は記していますが、このように深い繋がりがあった訳であります。野洲町小篠原発見の銅鐸群は、弥生時代中期から後期に起こった動乱の動きを如実に示す重要な文物であろうと私は考えているのであります。

(水野正好氏提供)



流水文銅鐸（昭和37年大岩山出土10口のうち1口）